エッセイ
『神功皇后』の 復活-2

SCE・Net　鹿子島達志

E-172

発行日
2024年7月1日

「神功皇后」の復活－１からの続き。

３.実在説の根拠の各論

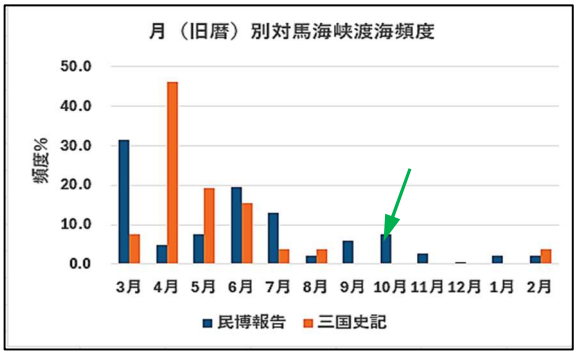
３―１．実在説：考古学他の証拠

７）冬季の海峡渡海　（前段は前号を参照されたし）

先ず、対馬海峡の海流速度は平均して1.3ノット（2.4km/時）である。距離は、計り方で違ってくるが、朝鮮半島(釜山)～対馬北端（鰐浦）は約50km、対馬南端～壱岐で約50km、壱岐～九州本土(呼子)で26kmであり、計約126kmとなる。ちなみに、遠泳で有名なドーバー海峡は、最短34km、流速は最大4～5ノットという。対馬海峡の連続横断（休憩なし）の遠泳記録は見当たらないが、ヨットでは、YOUTUBEの「ヨットARCADIA号の航海記」2014年5月がある。対馬海流と追風に助けられ、時には7ノットの順調なナイトセーリングで、夏季ではあるがたったの5時間で着いている。

ここで、**「中世日朝通交貿易における船と航海」**(国立歴史民俗博物館研究報告 2021年3月荒木和憲)という重要論文(以下、民博報告)を取りあげ、秋・冬季渡海の可能性を証明する。民博報告によれば、玄界灘と対馬海峡における中世の航海記録として、臨済僧玄蘇の朝鮮使行に関する『仙巣稿』がある。1580年、玄蘇は，博多―対馬間、そして対馬―釜山間の航海の記録を詩文のなかに書き留めている。対馬に27～29日も風待ち泊をつづけ、旧暦**10月の初（1～3日）の「日午」12 時に鰐浦を出航した**。このときの風は、**「風自東北隅来」**と記されている。民博報告は「鰐浦から釜山に渡航するには，東北風が順風だったようである」というが、**東北風なら向かい風になる。**しかし、帆船やヨットなら、周知の様に航行可能である（順風というか疑問だが）。釜山浦に入港したのは，深夜の丑刻（1～3時）であり、半日程度で着いている。以上の様に、玄蘇は神功皇后と同じ10月の初日（旧暦）に渡航していて、**秋・冬季でも渡海は可能である事を証明**している。

さらに、民博報告は、対馬藩の半島への**歳遣船**について尺量（臨検のこと）の回数を、出航する船の頻度として元亀3年度(1572年度）、天正元年度（1573年度）、天正2年度（1574年度）の記録を示している。下図は、民博報告と三国史記の月別頻度データを整理して作図したものである。



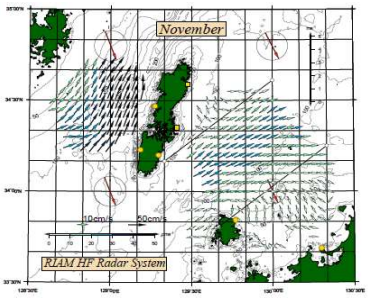
左図解説：三国史記では、9月～1月は一度も倭の侵攻はない。一方、民博報告の歳遣船は、秋季・冬季でも実績があり、特に10月に後半のピークがあり、注目すべきである。即ち、神功記の10月渡航は虚構ではない。かつ、後述するが、三国史記には月の記載がない侵攻記事があり、正にその時点が「新羅征討」の時期と合致する。図で、前半の春季・夏季は、全体として活発であり、渡海に最適な時期を示す。三国史記では4月、歳遣船で3月がピークであるが、それも１ヶ月の差である。

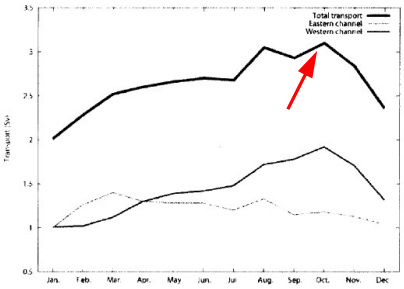
なお、民博報告は「朝鮮渡航が<u>10月（10月下旬～12月上旬）にも集中する点</u>については，自然条件では説明できそうにない」といい、自然条件のみでは、判断できないと、自ら認めている。

ところで、福岡の宗像大社は**毎年10月1日（新暦だが）**に数百隻による大規模な海上神幸行事、「みあれ祭」を行っている。祭神は神功皇后にも重要な役割を担う宗像三女神である。また、古事記の神功記に記載されている「表筒雄」「中筒雄」「底筒雄」の大神、即ち、住吉の神は、航海を司る星の神で、オリオン座をいう。周知の様に、オリオンは冬の星座で、見え始める**10月頃**だと、23時頃に東の空に見える。東なのは、新羅への航海は東北を目指すからと考えられる。これも、神功の冬季渡航の傍証となると考える。

以上により、秋・冬季渡海が可能である事を示したが、次に気候学・海洋学的に考察してみる。下図左は対馬の東西の海流状況（11月）を示す。西側に東北方向に強い海流があり、それは新羅の東部へつながる。右図は平均の海流輸送量を示すが、10月-11月（新暦）頃にピークがある。

月平均表流速場（実測値、11月）九大2007年　　**対馬海峡から日本海への月平均総輸送量 九大2012年**

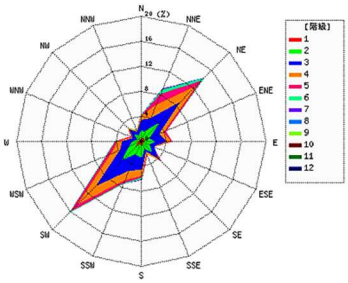


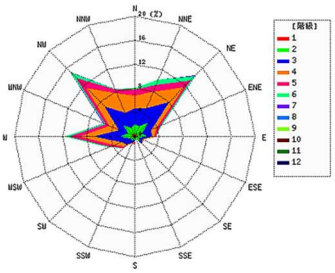


左図説明：
- 上から総量、対馬の西側海流、東側海流を示す。
- 縦軸は平均流量 Sv（$10^6 m^3$/sec＝百万ﾄﾝ/秒）
- 横軸は月（新暦）矢印は10月（新暦）

風と波について、海上保安庁海洋情報部の**『日本近海波浪統計図集』**から対馬周辺のデータを示す。左図は5月、右図が11月である（旧暦相当では4月、10月）。季節による差異は明瞭であるが、航行の難しさにも差があるかを考察する。

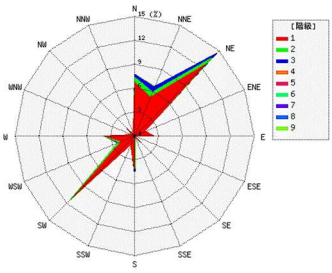
【風向・風力】

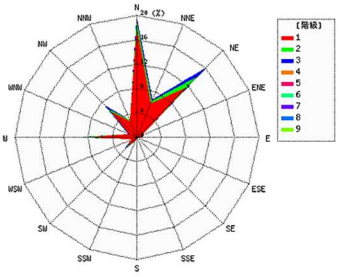




［ビューフォート風力階級表］
0：0.3m/s未満で鏡のような海面
1：0.3-1.6m/s未満で有義波高0.1m程度
2：1.6-3.4m/s未満で有義波高0.2m程度
3：3.4-5.5m/s未満で有義波高0.6m程度
4：5.5-8.0m/s未満で有義波高1.0m程度
5：8.0-10.8m/sで有義波高2m程度
6：10.8-13.9m/sで有義波高3m程度
7：13.9-17.2m/sで有義波高4m程度
8：17.2-20.8m/sで有義波高5.5m程度
9：20.8-24.5m/sで有義波高7m程度
10：24.5-28.5m/sで有義波高9m程度
11：28.5-32.7m/sで有義波高11.5m程度
12：32.7m/s-で有義波高14m超

【波のうねり】





［気象庁うねりの階級］
0：うねりがない。
1：短くまたは中位の弱いうねり（波高2m未満）
2：長く弱いうねり（波高2m未満）
3：短くやや高いうねり（波高2m ～ 4m）
4：中位のやや高いうねり（波高2m ～ 4m）
5：長くやや高いうねり（波高2m ～ 4m）
6：短く高いうねり（波高4m以上）
7：中位の高いうねり（波高4m以上）
8：長く高いうねり（波高4m以上）
9：2方向以上からうねりがきて海上が混乱している場合

倭の侵攻が5月（旧暦4月）などの春季・初夏に多いのは南西から北東への風と波の時期があるた

めと思われる。一方、11月（旧暦10月）は、風も波も北東部に偏っている。逆風であり、船の航行には、非常に困難に見えるが、よく見れば、強度は5月程度であり、一方、東北方向の海流の輸送量はこの時期に、もっとも多く、歳遣船の実績通り、航行可能だったと考える。ちなみに、対馬海峡を挟む歴史上の海戦をみてみると、白村江の戦いは663年**10月**、元寇は文永の役1272年**10月**、弘安の役1281年**7月**である。秀吉の文禄の役は1592年**3月**、慶長の役は1597年**2月**であった。以上、年月は西暦換算であるが、弘安の役の7月を除けば、必ずしも温暖な季節ではない。そもそも、戦争は非常時であって、神功皇后の冬季渡海が異常時であったことは間違いない。真珠湾攻撃も、厳冬の時期12月に、荒天を突いてオホーツク海から北太平洋を横断して決行されたではないか。

８）妊婦の渡海、武寧王の墓碑銘、鎮懐石

さらに、非実在説の根拠とされているのは、神功皇后が身重の身で対馬海峡を渡海したことへの不信である。現代でも、妊婦の乗船には事前の書類申請が要請され、原則は自己責任である。ただし、安定期なら渡航の例もあり、書紀も神功皇后は10月に渡航、2月に産んだとし安定期であった。さて、妊婦が対馬海峡を渡海して子を産んだ例が、書紀にある。即ち、雄略5年4月、百済の第21代蓋鹵王は、弟の昆支王(軍君）を日本へ派遣する際に、軍君の「君の婦を賜りたい」の願いに、蓋鹵王は臨月の妊婦を与え「途中で産まれれば、婦とその子同じ船に乗せ、速やかに国に送るように」と命じた。その後、6月に筑紫の各羅嶋にて子が生まれ、嶋君（セマキシ）と名付けられたーという。ところが、1971年に韓国公州の武寧王陵が発掘され、奇跡の発見とされた。墓誌銘には【寧東大将軍百済斯麻王年六十二歳癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩到】とあり、この斯麻（シマ）王は、生年も雄略6年相当の426年であり、嶋君と読みが同じで、**書紀の記述が証明された**。一方、三国史記には該当する記事がどこにもないのである。ところで、神功皇后が、渡海時に出産を延ばすために用いた、いわゆる「鎮懐石」は、後の世に山上憶良も詠んでいるが、その記録では、大きい石では長径37.5㎝、重さ11kgと、抱えるには、さすがに不自然であり、船のバラスト(安定用に底に積む石）と推測する。本当は、冬の寒さを防ぐ小さな温石ではなかったろうか。

３－２．実在説：文献上の考察

ここでいう文献とは日本の『日本書紀』『古事記』と朝鮮の『三国史記』『三国遺事』を指す。『三国史記』は三一書房1975年、『三国史記倭人伝(三国遺事を含む)』岩波文庫1988年を用いた。

１） 新羅征討時の新羅王名

（1）昔于老伝説

『三国史記』にいわゆる**「昔于老伝説」**という悲劇の将軍の記述がある。いわく、**12代沾解王の3年**に倭国の使臣の**「葛那古」**を新羅が接待したとき、接待役の**「昔于老」**は戯れに「早晩、汝の王を塩奴とし、王妃を飯炊き女にする」と言ったので、それを聞いた倭王は怒って**「于道朱君」**を派遣した。于老は失言をわびたが、倭人は許さず、于老は捕らえられて焼き殺された。于老の妻が、**13代味鄒尼師今**の時代になって倭国の大臣が新羅に訪れたとき願い出て、饗応し、大臣が泥酔したところを焼き殺し、怨みを晴らした。このことが原因で倭人は新羅の首都金城を攻撃してきたが、勝てずして引き上げたという。この**「昔于老伝説」**については、書紀にも極似した記事がある。神功記の新羅征討記事の別伝『一に云はく、新羅の王を禽獲にして、海辺に詣りて、

王の臑筋を抜きて、石の上に匍匐はしむ。俄ありて斬りて、沙の中に埋みつ（略）新羅の王妻、夫の屍を埋みし地を知らずして、乃ち宰に誂へて曰はく、「汝、当に王の屍を埋みし処を識らしめば、必ずあつく報いせむ。且吾、汝が妻と為らむ」といふ。是に、宰埋みし処を告ぐ。即ち王の妻と国人と、共に議りて宰を殺しつ。更に王の屍を出して、他所の葬る。是に、天皇聞こしめして、重発震怒りたまひて、大きに軍衆を起したまひ、頓に新羅を滅ぼさむとす（略）是の時に、新羅の国人悉に懼りて、不知所如。即ち相集ひて共に議りて、王の妻を殺して罪を謝ひにき。』と。この『三国史記』と書紀の記事は、どちらも大筋において酷似した内容であり、詳細な記述があり、事実であろう。神功記の別の一書では、王名を新羅王**「宇流助富利智干」**としている。ここで、宇流・助富利智干（ウル・ソホリチカ）＝于老（u-ru＝ウル）＋舒弗邯（spurkan＝ソホリチカ）となり、一致するので、**「宇流」ウル**を、**于老ウロウ**とする説が多い。しかし、于老は王ではなく、官位第一等**「舒弗邯」**で将軍であった。ただ、彼は**第10代奈解泥師今(在位196～230年)**の太子であり、**第16代訖解泥師今(在位310～356年)**の父なので王位に一番近い人物であったのは間違いない。ちなみに、同時代の日本側は、書紀紀年で、仲哀天皇(192～200年)、神功皇后(201～269年)、応神天皇(270～ 310年)、仁徳天皇(313～399年)であり、双方、紀年幅があっている。

前記の**「于道朱君」**は于道がウジ→内ウチ、朱君シュクンが宿祢スクネで**「武内宿祢」**に当てる説がある。**「葛那古」**は書紀の**「葛城襲津彦**ソツヒコ**」**の省略形と考えられ、また、葛城襲津彦は、書紀所引の『百済記』の**「沙至比跪**サチヒク**」**に当てられており、書紀に出てくる人物名が『三国史記』にもあることになる。神功記の真実性の一端が伺える。しかし、日韓の神功皇后の非実在論者は、共にこれを「伝説・説話」の類としている。神功記の方も、混乱がある。神功紀の新羅征討時の新羅側の王名は、本紀には先に述べたように**「新羅王波沙寐錦」**とある。この**「波沙寐錦」**は、三国史記の新羅本記に記す**第5代「婆娑尼師今」（在位80～112年）**と推定され、そうだとすると、仮に、通説の様に、干支2巡の120年を繰り下げても、上代に過ぎ、これも新羅征討や神功の否定論の根拠の一つになっている（後述する）。于老の没年は三国史記の新羅本紀では第10代沾解泥師今4年(249年)、列伝では沾解泥師今7年(253年)と差異もある。また、書紀の別伝では「宇流助富利智干」は降伏時点では殺されていない点も于老とは違うなど違いは多い。

（２）昔于老の年紀考察

ここでは、西暦換算の年代の不一致の解消に焦点を絞り、先報の「古代天皇紀年論の新考察」の紀年論を用いて考えてみた。念のために新羅王の関連年紀の詳細を次頁（次号）の表に示す。于老死亡時に、彼の子で後の第16代訖解泥師今はまだ幼児であったという。仮に2歳とすると、 ①53歳の子で、即位時には63歳、死亡時109歳。② 57歳の子、即位時59歳、死亡時105歳。
どちらも、年齢が不自然で、寿命は有り得ない。一方、(B)の修正紀年では于老の活躍年代と年齢にギャップはない。子の第16代訖解泥師今の即位時は、①39歳、②38歳となる。また死亡年齢は①49歳、②48歳となり、どちらも常識的である。于老死亡時の①45歳、②46歳は、2歳の父として有り得る年齢であり、子が幼いと言うのは、この年齢にしてはと言うことであろうと考える。

＜次号に続く＞